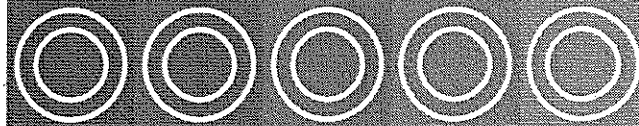


創世ホール通信 No.246

催し案内 + 文化ジャーナル
2015年7月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



人形劇団べんべろべえ公演 「ドラゴンのぼうけん」

7月2日(木) 11時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

出演●人形劇団べんべろべえ

内容●「どらごんのぼうけん」

対象●未就学児もOKです。2歳ぐらいから楽しめます。

主催●人形劇団べんべろべえ(兵頭☎088・698・6652)

■北島町内の主婦が作ったアマチュア人形劇団べんべろべえの10周年記念公演です。事前申し込み不要です。多数ご参集下さい。

絵画教室作品展 あーる・あーと絵画展

7月7日(火)～12日(日) 10時～18時

*初日は13時から 最終日は17時まで

会場●2階ギャラリー 入場無料

主催●あーる・あーと絵画教室(渡辺☎698・2871)

■アクリル、水彩、油絵等、約50点の絵画作品を展示。

植物採集講座 いっしょにやってみよう

7月18日(土) 10時15分～12時

会場●2階会議室 *採集のため外出もします。

内容●実際に植物を採集し、植物採集の仕方や標本の作り方について専門の先生に教えていただきます。

講師●木下覚先生(徳島県植物研究会会長)

対象●夏休みに植物採集をしようと考えている人、興味のある人

定員●15組(定員に達し次第締め切ります)

植物と貝に名前をつける会

8月29日(土) 10時～16時

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

講師●河野圭典先生(貝)

木下覚先生(植物)

主催●北島町立図書館(☎698・1100)

■事前に下調べをしてきてくださいね。

徳島クリエイターズマーケット⑬

7月25日(土) - 26日(日) 10時～17時

会場●2階ギャラリー

*最終日は16時迄

主催●徳島クリエイターズ・マーケット事務局(川久保☎080・4034・1090)

■凄腕の「モノ作り人」達が集うマーケット。本町在住のハンドメイド作家・川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは、新聞・テレビ・ラジオ等で話題沸騰の脱力系癒しキャラ《しししゃもネコ》を造形した作家です。ご注目を。



赤ちゃんとお母さんのための ビデオ上映会

「まめうしくん」

7月31日(金) 11時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

内容●「まめうしくん」(30分)

対象●0歳から3歳までの乳幼児とその保護者

主催●北島町教育委員会(☎088・698・9812)

■子育て支援の催しです。乳幼児とお母さん・お父さん歓迎。大きなシートを用意しているので、赤ちゃんがはいはいしても、よだれを垂らしてもだいじょうぶ。オムツ換えもできます■読み聞かせ「あかちゃんのおはなしのへや」は9月に開催します■11月上旬には乳幼児歓迎の「子育て支援ファミリー・コンサート」(出演=徳島県警察音楽隊)を今年も開催する予定です。

夏休みビデオ上映会

「怪談レストラン①」

7月31日(金) 14時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

内容●「怪談レストラン①」(77分)

主催●北島町立図書館(☎088・698・1100)

緊急告知●北島アンダーグラウンド・ナイト

遠藤ミチロウ 復活御礼+福島復興祈願 ライヴ

9月12日(土) 19時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売/2500円(当日3000円)

出演●遠藤ミチロウ

主催●遠藤ミチロウ★ライヴ実行委員会(☎088・698・1100)

■創世ホール8回目の登場となるパンク歌手・遠藤ミチロウ(1950年11月15日生)■福島県二本松市出身の彼は2011年、被災した郷里のために音楽家・大友良英や坂本龍一、詩人の和合亮一等と共にプロジェクトFUKUSHIMAを立ち上げ、同年夏、野外イベント「フェスティバルFUKUSHIMA」を開催。13000人を集め全世界の注目を集めた■2012年の「フェスティバルFUKUSHIMA」は世界同時多発イベントとして日本国内百か所超の他、海外でも連帯イベントが展開された■2014年、膠原病発症。入院治療を経て、薬の投与を受けつつライブ活動再開。2015年4月CD「FUKUSHIMA」、著作『膠原病院』発売。不屈の闘志で甦ったその雄姿は感動を与え続けている。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

日本文芸の大転換期⑥

戦後というところもない時代

出版芸術社相談役★原田 裕

●●創世ホール・アーカイヴスとして、原田裕(はらだ・ゆたか)さんが2003年10月16日に北島町創世ホールで行なった講演採録を連載でお届けしています。この講演は「平成15年度徳島県読書振興大会」(大会テーマ/検証・戦後出版界～大衆文学と子どもの本)の中で開催したものです。講師は2名いて、もう御一方は田中治男さん(当時ボプラ社会長)でした●●原田さんは、元講談社、現在出版芸術社相談役。1924年1月6日和歌山県生まれ。戦後ミステリーやSFの発展の礎を築いた名編集者として知られる。日本大衆文学史における重要人物の一人●●

■(前号から続く)もう一つ、今度は「他殺クラブ」へ入れない、次の世代のグループがでてきました。若いというのは必ずしも年齢ばかりじゃなくて、デビューが遅く、「他殺クラブ」へは入れない方々です。面倒を見てるといっては失礼な話なんだけれども、「おれたちも会を作ろう」というようなことで、頼まれて、また一つ作りました。それが「不在クラブ」といましてね。「不在」というのは、アリバイがないという不在です。

■一番おしまいに入ったのは『枯草の根』という乱歩賞作品で出た陳舜臣(ちん・しゅんしん)さん、それまでには斎藤栄さんとか海渡英祐(かいと・えいすけ)さん。そのほかに美術評論家の久能啓二さん、伝記作家の小島直記さん、飛鳥高さん、左右田謙さんなど。みんな何冊かずつ本は出しておられました。女性でも、藤木靖子さんとか、南部樹未子さん。他殺クラブだって、戸川昌子さんなんかも入っていたわけですから、不在クラブもそんなことで、推理小説の作家の会が三つできたわけですね。熱気あふれるミステリーの時代でしたね。

■また、私は、ミステリーだけではなく、SFみたいなものも好きで、そのころまだ日本に本格的なSFがなかったもので、なんとかSFを出したいと思っていました。実はもう少し前ですけれども、戦時中は休刊していた『講談倶楽部』という雑誌を講談社が再刊したことがありました。そのとき、少し毛色の変った人を書いてもらおうと。そしたら「海野十三はどうしたんだろう」「あの人は有名な人なのに、最近ちっとも書いてないじゃないか」「海野さんに書いてもらえないだろうか」「さあ、ちょっと無理じゃないかな」と、いろいろありましたが、御当地に縁の深い海野十三先生のところへ、「『講談倶楽部』が今度できますから、先生、何か書いてくれないませんか」ということで、僕も初めて、一回だけ伺いました。非常にニコニコして、いい方で、優しくしていただきましたが、優しいばかりで、承知してはくださらないんです。もうその時は、体もお悪かったですね、昭和23年だから。24年に亡くなりました。「私は子どものものは書くけれども、もう今は大人のものはとても書けません」。非常に柔らかいけれども、ピシッとしたお断りですね。「これはもう無理に言ってもだめだな」ということで、あきらめました。それ以来SFをやりたいという思いは変わりませんでした。

■昭和33年、私は講談社の子会社の東都書房というところへ転属になりました。そこでミステリーや探偵小説の全集をいろいろ作りましたが、そのときに、『東都ミステリー』という叢書も作ったんで

す。これは全作書き下ろしを原則にしていまして、星しんいちさんや今日泊亜蘭さんにSFをお願いしました。『光の塔』は、日本で本格的なSFが書かれた最初の作品なんです。その著者が今日泊さんです。だが、「SFとは何ですか」とか「そんなもの売れるのかな」とかいうことでなかなか……。これを説明していたのでは長くなって、会議にならないわけです。だから面倒くさく委からミステリーだと言って、まあ営業をだました形で『東都ミステリー』の中に入れて出版しました。それが、私がSF小説というものを実際に出した初めてです。

■それから新田次郎さんの『壺鳴り』とか。そのうちに『光の塔』は、ベストセラーじゃありませんが、まあまあ売れて重版になりました。そこで、眉村卓さんに、『燃える傾斜』を書いてもらい、それはもう堂々のSFということで、「東都SF」という別のシリーズをつくって出しました。後ずっと、「東都SF」ということでSFを出していく予定でしたが、僕は何しろサラリーマンですから、ほかへ転出を命ぜられまして、東都書房にいらなくなりました。ちょうどその時に広瀬正さんという方の『マイナス・ゼロ』といういい作品が仕上がっていましたが、僕がいなくなって、講談社からは出せなかったんです。SFでは、また、いろんな面白い話があるんだけど、それをやり出すともう時間がいくらあったって足りませんので、割愛させていただきます。

■一口に申しますと、その当時の10年ぐらいというものは、本当にととととと月日がたつ。今でいえば、そのころの1年というのは今の10年ぐらいに匹敵したのかな。東京の街もどンドン変わっていく。文学もどンドン変わっていく。そのうちに中間小説だの、大衆小説だのといわなくなった。大衆作家といっても軽蔑する人はいなくなった。代りに、エンターテインメントとか何とか片仮名語になる。挿絵画家も、イラストレーターと横文字になった。

■そして今日になって、ミステリーの作家も、SFの作家も、みんな直木賞を取るということで、いいものはいいいという非常にいい方向へ変わってきたと思います。それはなんでだろう。日本語の文語体というものを破壊して、ここまで来た。形にとらわれていた日本の文体に、今は定形がなくなった。服装を見ても、昔の日本人は、みんな同じものを着ていたから、その人の職業が服装でわかったものです。

■作家の人も、昔の人と比べると、今の人はいいですよ。非常にうまいと思います。もともと、うまいということがイコールいい小説なのかというと、それはまたちょっと違う別次元の問題ですが。今の江戸川乱歩賞は、素人の方が何百枚という長編を書いてくるわけですが、昔はそういうことはできませんでした。なぜできなかったかという、文語体にとらわれて、文章というのは難しいと思っているから書けなかった。今の人はいいから書けるということなのですね。つまり、日本文芸が大転換を成し遂げたのですよ。

■非常に雑駁で、とりとめのないことを申し上げて、失礼いたしました。このへんで話を終わります。一番面白いところは、またこの次ということにさせていただきます。どうもありがとうございました。(完結)


新刊紹介●根本圭助『忘れ得ぬ人々・思い出の風景』北辰堂出版

■北島町創世ホールは、2013年2月24日に著名な挿絵画家・根本圭助さんの講演会「異能の画家・小松崎茂～少年の夢を描き続けた人」を開いた。本書は、その根本さんの待望のエッセイ集。創世ホール講演会のことにも触れてくださっている■根本さんは、偉大な昭和の絵師・小松崎茂の高弟で、絵も文章も書ける人なので小松崎の評伝(『異能の画家・小松崎茂』光人社、1998)は、根本さんの筆による。小松崎は根本さんのようなよい弟子をもって幸せだったと思う(そのことは以前夕刊コラムに書いたことがある)■根本さんは、千葉県松戸市在住。タブロイド判地域情報紙「松戸よみうり」(「読売新聞」に月1回はさんで市内で配布)に連載を持っておられる。本書はその集成である。四六判上製本で2段組619頁、400字詰め換算で軽く1千枚超の文章量がある。貴重な写真図版も豊富で、大変な重量感と読み応えあるエッセイ集だ。第1部は小松崎茂の思い出をつづり、2部は交遊録、3部は交遊録+随想といった趣だ。第1部では、小松崎の最晩年にも言及しており、入院して亡くなるまでのエピソードは、初めて活字化された貴重な証言記録も含まれているのではないかと思う■海野十三が晩年の1948年から連載し小松崎茂が絵を描いた「怪星ガン」と、掲載誌『冒険少年』(戸田城聖や池田大作が関わった雑誌)についても詳しく言及されている。SF研究者や徳島の文芸研究家は必読必携■また、根本さんは仮面ライダーカードなどのイラストを膨大に描かれた人だ。子ども(乳幼児～小学生)の靴、パジャマ、文具などに数多くのアニメ・キャラクターなどが描かれた商品があるが、ある時期はそれらの大半を手がけていて、向こうから来る子どもたちの一団が全員根本さん作成のイラストのグッズ類を持っていたことがあるといったエピソードをお持ちだ。だから、その業界(紙製玩具や食品玩具やノベルティ・グッズの類)にも詳しい。紙製玩具メーカーの小出信宏社と関わった思い出なども本書に記録されている。この種の記録は、正史には殆ど登場しない。だからこそ氏のような方の証言記録は貴重なのだ。また、フジテレビの名プロデューサー・横沢彪(たけし)氏との飛び出す絵本をめぐる苦労話の数々など、腰を抜かしそうになった。とにかく物凄く面白い!■本書を多くの人に読んでいただきたいと切に願う。◆根本圭助『忘れ得ぬ人々・思い出の風景』北辰堂出版、2015年6月20日初版発行、四六判・619頁、本体3200円+税。(文責=北島町教育委員会教育次長・小西昌幸)

忘れ得ぬ人々
思い出の風景

昭和から平成へ
私の交遊録

根本圭助



ISBN978-4-8644-0095-4
97848644271882

定価 本体3200円
北辰堂出版

異能の画家小松崎茂の愛弟子による初の自伝的エッセイ

昭和から平成へ
私の交遊録

根本圭助

北辰堂出版